高齢期における交流からみた「精神的居場所」の特徴と居住形態との関係

—奈良県橿原市今井町の場合—

THE PLACE WHERE THE ELDERLY RELAXING AND PLEASURING
VIEWED FROM THE RESIDENTIAL STYLE OF THE ELDERLY

—The case of Imai town, Kashihara city, Nara prefecture—

牧野 唯*, 今井 範子**

Yui MAKINO and Noriko IMAI

The purpose of this study is to clarify the place where the elderly feel relaxing and pleasuring, and we investigate the place viewed from the residential style in Imai, Nara Pref. The results are as follows,

1) Most of the place relax the elderly are within the house. In Imai, there are not enough place for the elderly to communicate with the residents of Imai. 2) According to the residential style of the elderly, in the case of separating from their married children in Imai, they can contact and communicate with their children or grandchildren easily. 3) It is required to provide a good choice of the places where the elderly feel relaxing and pleasuring, such as a park, and to utilize the unoccupied house.

key word : the residential style of the elderly, the living place where the elderly feel relaxing and pleasuring, communication, dwelling style, Imai Town, Preservation district for groups of historic buildings

高齢期の居住形態, 居場所, 交流, 住様式, 今井町, 伝統的建造物群保存地区

1. はじめに

建造物保存のため平成5年重要伝統的建造物群保存地区に選定された奈良県橿原市今井町を事例とし、歴史的町並みが日々生活を営む生活空間として存続する可能性を探るための基礎的知見を得ることが本研究の目的である。前報¹⁾で述べたように、家族の流動化や個人化にともない、今井町においても従来の親子同居にとらわれず子世代との別居化が進み、単身化の傾向がみられる。居住者の高齢化や流出が進み、町の発展性、閉鎖的な町の特長、若年者の今井町離れが憂慮されている²⁾が、子世代との近居化の傾向を把握し、次世代への居住の継承意向を確認した。今井町には文化財に指定される江戸期からの住宅のほか長屋建借家など小規模住宅も存在し、全体として歴史的町並みが形成され地域の独自性をつくっている。個々の住宅は外観の規制と補助を受け改修される一方、老朽化していても改修が滞っている場合も存在する。また、単に建物を保存し観光地化するのではなく、今井町居住者は居住地として存続することを求めている。生活空間としての方向性を考えていく上で、面的に存在する伝建地区であるから、地区内における住空間の使われ方等の問題を検討することは極めて重要な課題である。

近年、住宅規模の大きさ等、物理的な豊かさのみではなく、精神的な豊かさから生活を評価する価値観が高まりつつある³⁾。このよ

うな社会動向をふまえ、居住者が精神的に充実した生活を過ごしうる空間へと今井町を再構築することが、今井町における居住の継続力を高めることにつながると思われる。特に、これからの高齢社会に向け高齢者にとって、住みやすく豊かな生活空間を提供するには、人と交流するための空間を整備することが一層重要性を増し、今井町の発展方向にも影響すると考えた⁴⁾。そこで、〈くつろげる・落ち着く〉、〈楽しい〉と意識する空間および交流の志向性を分析し、高齢者にとっての「精神的居場所」を把握することによって、高齢期における豊かな生活空間のあり方を検討することとした。

2. 研究方法

2. 1 「精神的居場所」について

本研究では、今井町で高齢期を過ごすには居住者が精神的に豊かな生活空間を享受することが重要であると考え、〈くつろげる・落ち着く〉、〈楽しい〉と意識する時空間⁵⁾を分析することによって、それら空間からみた「精神的居場所」の特徴を明らかにすることとした。また、平日と休日の昼間に最も長くいる場所をたずね、これを「物理的居場所」とし、それらに対する概念として「精神的居場所」のあり方を分析する。この空間は住宅内部のみに限らず地域等の住宅外部にわたり存在しうることから、住宅と居住地と連続性の中で「精神的居場所」を把握しているところに本研究の特徴がある。

* 尚絅短期大学 専任講師・博士(学術)

** 奈良女子大学生活環境学部 教授・工博
人間環境学科住環境学講座

Lecture, Syoukei College, Dr. Ph.

Prof., Dept. of Residential Environment and Design, Faculty of Human Life and Environment, Nara Women's Univ., Dr. Eng.

図 1 世帯類型 —65才以上, 65才未満—

図 2 子との居住形態 —65才以上, 65才未満—

2. 2 調査概要

(1) 調査方法

旧環境内にある伝建地区内の全世帯を対象として留置法自記式による質問紙調査を実施した⁶⁾。調査時期は1997年4月下旬～5月上旬である。調査状況は調査対象住宅数が419、世帯票の配票数が349票、回収数が329票、回収率が78.5%である⁷⁾。さらに、個人の意識を把握するため、18才以上の居住者に個人票への回答を依頼し、有効サンプル数712票(65才以上n=235, 65才未満n=476, 年齢不明n=1)を得た。本報は個人票のうち65才以上の高齢者についての分析を中心としている。なお、今井町の伝建地区内人口は1391人(65才以上は397人)である⁸⁾。

(2) 調査対象の概要

①世帯類型

65才以上の高齢者の所属する世帯類型は3世代以上の「世代家族」が最も多く、特に、75才以上の後期高齢者に「世代家族」が多い傾向がある(図1)。また、65才以上には「夫婦のみ」と「単身」が増加しており、高齢期において子と別居化の傾向がみられる。

②子との居住形態

さらに、既婚者のいる者について、子との居住形態⁹⁾をみたものが図2である。65～74才の前期高齢者には「近居」が比較的多く、「遠居」の場合でも、時間的距離が車や電車で1時間以上の割合は14.4%であり、子世代の多くは奈良県内や橿原市内に居住している。高齢期における居住形態は、子との同居が主流であるが、子と別居している場合、近居や遠居でも時間的距離は近い傾向がある。

3. 高齢期における「物理的居場所」の特徴

まず、平日と休日の昼間最も長くいる場所¹⁰⁾を分析し、高齢期における「物理的居場所」の特徴を明らかにする。

3. 1 平日・休日の昼間最も長くいる場所

平日の昼間最も長くいる場所は「居間」が最も多く、「自分の部屋」や「食事室」等の自宅内で過ごす場合がほとんどである(図3)。自宅外の場合は「仕事場」が多く、性別では男性の20.0%をしめる。一方、休日の昼間最も長くいる場所は「居間」が多く、65才以上

図 3 平日と休日の昼間最も長くいる場所 —65才以上, 65才未満—

では自宅内の割合が9割強をしめる。なお、休日の昼間の場合、65才未満では「友人の家」(3.1%)、「趣味・習い事の場」(6.8%)等の自宅外が21.7%をしめるが、65才以上では自宅内の傾向が強い。

3. 2 交流相手

さらに、交流の特徴をみるため、交流相手について「自分ひとり」および、「血縁」¹¹⁾、「その他」に大別してたずねた(表1)。平日の昼間は自宅内にひとりである場合が多く、休日の昼間は自宅内に配偶者、子や孫等という場合が平日より多い。さらに、平日の昼間の場合を性別でみると、男性に多いのは自宅内に妻という場合(27.9%)および自宅外に職場の人という場合(17.4%)である。女性に多いのは自宅内にひとり(47.8%)、子や孫(8.0%)、家族(9.7%)という場合である。また、世帯類型別では、単身者には自宅内にひとり(87.0%)でいる場合が多く、世代家族の者でも自宅内にひとり(37.9%)でいる場合がみられ、平日の昼間は交流が少なく自宅内にいる状況がわかる。

表 1 平日と休日の昼間の交流相手 —65才以上—

	平日の昼間 (n=235)		休日の昼間 (n=235)	
	平日 (%)	休日 (%)	平日 (%)	休日 (%)
1. 自宅内	45.3	38.5	45.3	38.5
2. 血縁*	36.6 (24.7/4.6/7.1)	54.5 (37.5/6.6/10.4)	36.6	54.5
3. その他	3.1	1.6	3.1	1.6
4. 自宅外	3.4	1.6	3.4	1.6
5. 血縁*	3.9 (3.0/0.9/0.0)	2.2 (1.1/1.1/0.0)	3.9	2.2
6. その他	7.7	1.6	7.7	1.6

*血縁のうちわけは、順に(配偶者/子や孫/家族)を示す。単位: %

4. 高齢期における「精神的居場所」の特徴

個人票では〈くつろげる・落ち着く〉、〈楽しい〉と意識する場所と相手を2番目までたずねており、回答がない場合、1番目のみ記入があった1つの場合、1番目と2番目の両方とも記入があった2つの場合に分類して分析を進める。

4. 1 〈くつろげる・落ち着く〉場所

(1) 〈くつろげる・落ち着く〉場所の有無

くつろげる・落ち着く場所がない場合は全体の15例(2.2%)、1つの場合は2割強、2つの場合は7割強をしめる(図4)。

諸属性との関連をみると、くつろげる・落ち着く場所の有無は年

年齢 ($p<0.05$), 世帯類型別 ($p<0.05$) によって異なるが, 男女による顕著な違いはみられない。くつろげる場所がない場合は 55~64 才に比較的多く (図 4), 相対的に男性が多い。1 つの場合は高齢層ほど多く, 2 つの場合は高齢層ほど少なく, 年齢が若いほど多い。高齢層にくつろげる場所がない場合や 1 つのみの場合が多い傾向があり, 精神的居場所となる空間が少ないことが高齢期の特徴である。

(2) くつろげる・落ち着く場所

くつろげる・落ち着く場所が 1 つの場合, 最も多いのは「居間」であり (図 5), 特に 65 才以上に自宅内の傾向が強い。一方, 2 つの場合, 1 番目は「居間」が最も多いが, 「自分の部屋」も多い。これは 65 才未満の者と同様にくつろげる場所として個室が志向され, 住宅内に個室があると場所の選択性が高まるためと推察できる。また, 世帯類型別では世代家族の者に「自分の部屋」の割合が高く (29.5%), 多世代で同居している場合は個室がくつろげる空間になっている。夫婦のみの場合にも同様の傾向がある。2 番目は「居間」と「自分の部屋」が多く, 1 番目も 2 番目も自宅内が 7 割をしめ, くつろげる場所は自宅内に偏っている。自宅外の場合は 65 才未満に「実家」や「友人の家」, 65 才以上に「親戚の家」, 「子の家」等が多い。自宅外では血縁宅が多く, これは今井町近辺に親戚や子が

居住するためと考えられる。また, 65 才以上には「家の庭」が比較的多いが「公園」や「図書館」はくつろげる空間にはなっていない。

(3) くつろげる・落ち着く・相手

1 つの場合, くつろげる・落ち着くのは「ひとり」が最も多く (図 6), 65 才以上には「配偶者」が多い傾向がある。そのほか「同窓の友人」や「趣味・習い事を通じた友人」が数例みられる。2 つの場合, 1 番目は「配偶者」が最も多く (図 6), 「同居している息子」や「孫」等の血縁が 1 つの場合に比べて多い傾向がある。家族以外では「趣味・習い事を通じた友人」, 「近所の友人」が数例みられる。2 番目は「ひとり」が最も多いが, 「配偶者」のほか, 「別居している娘」や「孫」が多いことが 65 才以上の特徴である。また, 「同窓の友人」, 「近所の友人」は回答されているが, 自治会, 保存会, 婦人会等の地縁を通じた友人は予想に反して少ない。

4. 2 〈楽しい〉場所

(1) 〈楽しい〉場所の有無

楽しい場所の有無をみると (図 4), 楽しい場所がない場合が全体の約 2 割, 1 つの場合が 2 割強, 2 つの場合は約 6 割をしめる。

年齢と世帯類型による違いが顕著であり, 年齢別では, 楽しい場所がない場合は高齢層に多く, 75 才以上のうち 3 割をしめる。1 つの場合も高齢層ほど多くなり, 年齢が若いほど 2 つの割合が高い。特に, 高齢者が属する世帯類型別では, 楽しい場所がない場合は夫婦のみ, 夫婦と親, 単親と子に比較的多い (図略)。1 つの場合は単身と世代家族の者に多く, 2 つの場合は夫婦と子に多い傾向がある。

(2) 〈楽しい〉場所

1 つの場合, 「居間」が最も多いが (図 7), 65 才以上には自宅内よりも自宅外 (56.9%) の傾向があり, 「宗教施設」, 「趣味・習い事」等が多い。65~74 才の前期高齢者に自宅外の傾向が強い (63.6%) が, 75 才以上の後期高齢者では自宅内の傾向となり (52.0%), 「居間」, 「食事室」をあげる者が多くなる。一方, 2 つの場合, 1 番目は「居間」が最も多く (図 7), 1 つの場合に比べて「自分の部屋」, 「食事室」, 「客室」, 「家の庭」等に分散し, 自宅内の傾向が強い。なお, 自宅外では「趣味・習い事」が多い。2 番目は「居間」のほか「友人の家」, 「子の家」, 「親戚の家」が多く, 自宅外の割合が増える。

図 4 くつろげる場所, 〈楽しい〉場所の有無 - 年齢別 -

図 5 くつろげる・落ち着く場所 - 1つの場合, 2つの場合 -

図 6 〈くつろげる・落ち着く〉相手 —くつろげる場所が1つの場合, 2つの場合—

さらに, 1 番目と 2 番目の関連をみると(表 2), 1 番目も 2 番目も自宅内(「内内」)が最も多い(35.6%)。「内内」の場合, 1 番目と 2 番目ともに居間が最も多く(表 2), 居間と自分の部屋も多い. 年齢別では, 前期高齢者に「内内」(39.2%)が増え, 男女ともに同様の傾向がある. ついで, 1 番目も 2 番目も自宅外(「外外」)が多く, 75 才以上に「外外」の割合が高い(43.3%). 「外外」の場合, 趣味・習い事の場と子の家が多いことが特徴である. 75 才以上には世代家族に属する者が多いことから(図 1), 自宅外が多い理由として子世代と同居しているため出かけやすいことが推測できる¹²⁾. また, 世代家族の場合は全て息子との同居であり, 事例 1(女性, 80 才)のように別居している娘の家を楽しい場所として回答する例もある(表 3). なお, 事例 1 の場合, 子との住み方は同一建物内同居を希望しているが, 実際には同居子や孫が楽しい相手になっていないことがわかる.

表 2 1 番目と 2 番目に〈楽しい〉場所 —2つの場合 (n=104)—

	1 番目	2 番目
内内 35.6% (37)	居間 20	居間 10, 自分の部屋 4, 食卓 3, 客室 2
	自分の部屋 5	居間 3, 食卓 1, 台所 1
内外 18.2% (19)	居間 6	友人の家 2, 子の家 1, サークル活動の場 1
	自分の部屋 2	仕事場 2
外内 15.4% (16)	趣味・習い事の場 6	食卓 2, 居間 1, 台所 1, 客室 1
外外 30.8% (32)	趣味・習い事の場 13	子の家 5, 友人の家 2
	友人の家 6	趣味・習い事の場 2, 子の家 2

(3) 〈楽しい〉相手

1 つの場合, 65 才以上に「宗教関係の人」が多いことが特徴である(図 8). そのほか「趣味・習い事を通じた友人」や「サークルでの友人」も多いが, 自治会, 保存会, 婦人会等の地域に関連した地縁のしめる割合は相対的に少ない. 一方, 2 つの場合, 1 番目は「趣味・習い事を通じた友人」が最も多く(図 8), そのほか「配偶者」

図 7 〈楽しい〉場所 —1つの場合, 2つの場合—

図 8 〈楽しい〉相手 —楽しい場所が1つの場合, 2つの場合—

や「孫」等の血縁,「近所の友人」が1つの場合と比べて多い. 2番目は「同窓の友人」が最も多く,「別居している娘」や「孫」が比較的多い. 2つの場合には,1つの場合と比べ配偶者や孫等の血縁が多いことが特徴である. また,楽しい相手として近所の友人は多いが,自治会や婦人会という地域活動を通じた友人は少なく,保存会の友人が若干みられるが,これらの地縁は交流の単位にあまりなっていないことが推察される. 今井町では地縁を通じた交流が活発であると予測していたが,組織はあっても精神的な面で楽しいと意識される交流はあまり行われていないことが示唆される.

(4) 〈楽しい〉場所と相手との関連性

楽しい場所と相手をみると,1つの場合は宗教施設に宗教関係の人という場合が最も多く(9例,58例中16%),趣味・習い事の場合に趣味・習い事を通じた友人も多い(4例,58例中7%). 1つの場合はこれら選択縁との交流志向があるため65才以上に自宅外の傾向が強くなっている. また,自宅外の場合は住宅規模が小さく(平均居室数6.9室,延床面積177.9㎡),宗教施設と回答した世代家族の者の事例2(男性,70才)をみると,6人家族で居室数が8室,延床面積が116.6㎡のように,物理的な要因が関係していることが推察され,住宅規模の小ささを補える交流の場が必要とされることが指摘できる. また,趣味・習い事の場合と回答した単身者の事例3(女性,66才)では,今後体が不自由になった時のことや出かけるのが不自由であることを気にしており,年齢とともに遠方へ外出し難くなることを考慮すると,今井町内に交流の場があれば交流の選

択性が高まると思われる.65才以上の高齢層に楽しい場所が1つの場合が多く,自宅外の傾向があることから,住宅規模の小ささを補い,身近に交流できる場が望まれていることが指摘できる. また,単身者の事例4(女性,68才)では,自由記述欄に「ひとり暮らしの高齢者が集える場所」の要望がみられ,町内の人とお茶を飲みながら話せる所があれば,自宅内にひとりでいる交流のない場合にも人との交流の場を提供し,交流の選択性を高めることができる.

一方,楽しい場所が2つの場合,65才以上には1番目と2番目ともに居間が多い傾向があり,その相手は配偶者と同居の娘や別居の息子等,両方とも血縁の場合が半数をしめる(表4). なお,2つとも自宅内(「内内」)の場合,楽しい相手が両方とも血縁であるのは12例(37例中32%)と最も多い.「内内」の場合は住宅規模が大きいため(平均居室数8.9室,延床面積231.9㎡),別居子や孫が訪ねてきやすい等,自宅が交流の場となりうることが推察される.

表 4 〈楽しい〉場所と相手 —2つの場合—

場所	相手	世帯類型	居住形態
1番目-2番目	1番目 2番目		
居間-居間 10例	配偶者 同居の娘	夫婦と子	近居
	配偶者 別居息子	夫婦のみ	
	同居の息子 きょうだい	夫婦と親	近居
	別居息子 別居娘	夫婦と孫	
	その他(家族) その他(家族)	夫婦と子	近居
	配偶者 ひとり	夫婦と子	
	配偶者 近所の友人	夫婦と子	近居
	配偶者 保存会の友人	夫婦と子	
	別居娘 同窓の友人	単身	近居

表 3 事例

		基本属性								近隣・友人つきあい		
〈楽しい〉場所・相手		性別	年齢	居住年数	継承/創設	敷地・延床・居室	職業(就業地)	世帯類型	居住形態	近隣	友人の住まい	
事例1	2つ 外外	趣味の場・家の趣味の友人 別居娘	女性	80才	53年	継承型	1102㎡・810㎡・16室	自営業(今井)	世代家族	息子同居	親しい	今井町以外
事例2	1つ 外	宗教施設・宗教関係の人	男性	70才	70年	継承型	120㎡・117㎡・8室	無職	世代家族	息子同居	親しい	今井町内
事例3	〃 外	趣味の場・趣味を通じた友人	女性	66才	66年	継承型	97㎡・97㎡・4室	パート(市内)	単身	不明	親しい	両方
事例4	〃 内	居間・ひとり	女性	68才	50年	継承型	71㎡・97㎡・4室	無職	単身	遠居	不明	不明
事例5	〃 外	宗教施設・宗教関係の人	男性	74才	37年	創設型	87㎡・84㎡・4室	自営業(不明)	夫婦のみ	近居	挨拶程度	両方
事例6	〃 内	居間・ひとり	女性	78才	49年	創設型	97㎡・97㎡・5室	無職	単身	遠居	親しい	今井町内

「外外」の場合は、趣味・習い事の場と子の家のように（表2）、趣味等を通じた選択縁との交流以外に、別居子との交流志向があるため自宅外の傾向がみられる。また、趣味・習い事の場と友人の家の場合も多く、2番目に同窓の友人との交流志向があることもわかった。「外外」の場合は、子の家や友人の家のように相手の家が楽しい場所となっていることが特徴である。

以上、くつろげる場所と楽しい場所と交流の視点から精神的居場所をとらえた結果、くつろげる場所は居間と自分の部屋が多く、自宅内に偏っている傾向があり、くつろげる相手はひとりあるいは配偶者や孫等の血縁という場合が多いことが明らかになった。楽しい場所は自宅内の居間、自宅外の宗教施設、趣味・習い事の場、友人の家、子の家が多く、楽しい相手は血縁が多いほか、宗教関係の人や趣味・習い事を通じた友人等の選択縁と交流する場合も多い。しかし、くつろげる相手や楽しい相手として、今井町の地縁を通じた友人との交流が少ないうえ、今井町内の身近な所にくつろげる空間、楽しい空間はあまりないことが推察できる。

4. 3 「物理的居場所」からみた特徴 —平日・休日の昼間—

65才以上の高齢者が昼間長くいる場所と〈くつろげる・落ち着いた〉〈楽しい〉場所との関係をみたものが図9である。

平日の昼間長くいる場所が「精神的居場所」と同一の割合は、くつろげる場所の場合は約6割、楽しい場所の場合は約2割である。休日の昼間の場合も同じ傾向であり、くつろげる場所の場合は約7割、楽しい場所の場合は2.5割をしめる。

平日の昼間長くいる場所が、くつろげる場所となっている割合が高いのは居間と自分の部屋である。高齢者は自宅内にいる場合が多いが、これらの場所はくつろげる場所とみなされ、日常持続的に満

図9 平日昼間最も長くいる場所と精神的居場所 —65才以上—

たされていると考えられる。

しかし、平日の昼間過ごす場所が、楽しい場所となっているかをみると、同一ではない場合が多い。居間にいるけれども趣味の場や子どもの家等を楽しい場所と見ていたり、自分の部屋にいるが趣味の場等を楽しい場所と見ている場合がみられる。趣味の場や子どもの家は非日常的ではあるが楽しい場所となり、このような場所があることによって精神的な豊かさを満たしていると考えられる。

5. 居住形態からみた〈楽しい〉相手の特徴

図2に示したように今井町では高齢期に子世代との同居が主流であるが、夫婦のみや単身の世帯が増えつつあり子世代との別居化が進むと予測される。別居の場合でも子は比較的近くに居住している場合が多く、別居子や孫との交流が容易であれば、交流の選択性が高まる。そこで、子（既婚子）との居住形態別にみた楽しい相手との関連を分析する。

表5 〈楽しい〉相手の特徴 —居住形態別—

	1.自分ひとり	2.配偶者	4.きょうだい	5.同居している息子	6.同居している娘	7.別居している息子	8.別居している娘	9.孫	10.家族	11.その他の親戚	12.近所の友人	13.老人会の友人	14.自治会の友人	15.保存会の友人	16.婦人会の友人	17.生協を通じた友人	18.住民運動での友人	19.配偶者を通じた友人	20.子供を通じた友人	21.ペット	22.仕事・職場の友人	23.同窓の友人	24.ボランティアでの友人	25.宗教関係の人	26.サークルでの友人	27.趣味・習い事を通じた友人	28.その他友人	計
【1つの場合】																												
同居	1	0	1	2	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	5	1	3	2	24	
近居－歩いて約5分	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	3	
歩いて約15分（車で5分）	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
遠居－車や電車で20～30分	0	0	0	0	0	3	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	7	
車や電車で30分～1時間	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3	
車や電車で1時間以上	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
計	4	1	1	1	2	3	1	5	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	1	7	2	4	2	40
凡例： 血縁、 地縁＋選択縁、 選択縁 単位： 事例数																												
【2つの場合】1番目																												
同居	4	5	3	1	1	0	1	6	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	2	1	6	0	40	
近居－歩いて約5分	0	3	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	6	
歩いて約15分（車で5分）	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	
遠居－車や電車で20～30分	0	1	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	8	
車や電車で30分～1時間	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	6	
車や電車で1時間以上	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	4	0	8	
計	5	10	3	1	1	2	3	12	3	0	8	0	0	1	0	0	0	0	0	0	5	0	4	2	13	0	73	
2 番目																												
同居	4	5	2	2	1	0	6	3	2	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	4	1	1	0	2	40	
近居－歩いて約5分	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	6	
歩いて約15分（車で5分）	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	5	
遠居－車や電車で20～30分	1	0	1	0	0	1	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	8	
車や電車で30分～1時間	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	6	
車や電車で1時間以上	0	2	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	1	0	0	8	
計	5	9	3	2	1	3	9	8	2	4	2	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	12	1	1	1	3	3	73
凡例： 血縁、 地縁＋選択縁、 選択縁 単位： 事例数																												

5. 1 同居の場合の〈楽しい〉相手

楽しい場所が1つの場合(表5), 楽しい相手は「宗教関係の人」「趣味・習い事を通じた友人」が多く、「孫」「同居している娘」や「息子」よりも、選択縁との交流の傾向がある。一方、楽しい場所が2つの場合、1番目は「孫」「配偶者」が多いが、「趣味・習い事を通じた友人」「同窓の友人」等の選択縁も多いことが特徴である。選択縁に比べると同居している息子や娘は相対的に少ない。また、2番目には「別居している娘」が多く、前述した事例1(女性, 80才)のように、息子と同居の場合に別居の娘との交流がみられる。

5. 2 近居の場合の〈楽しい〉相手

楽しい場所が1つの場合(表5), 事例は5例と少ないが、楽しい相手は「別居している娘」が1例のみで、子との交流より「婦人会の友人」や「宗教関係の人」の地縁や選択縁との交流の方が多い。また、子と近居の場合は規模の小さい住宅が多い¹³⁾ことから、自宅外(「宗教施設」と回答した事例5(男性, 74才)の場合をみると、夫婦のみで居室数4, 延床面積84.2㎡であり住宅規模が小さいことがわかる。この場合、長女が今井町内に近居しており、毎日訪ねて来ているが楽しい相手として意識されていない。また、居間にひとりという事例6の場合(女性, 78才)も、子は月に2, 3回品物を届ける時等に訪ねて来る程度で交流頻度は少なく、楽しい相手にはなっていない。このように子と近居していても住宅規模が小さいと子世代が訪ねにくい場合や交流相手になっていない場合がある。

一方、楽しい場所が2つの場合、事例数11のうち1番目に楽しい相手として「孫」(3例)や「別居している息子」(2例)、2番目には「別居している娘」(2例)や「別居している息子」(1例)がみられる。子世代が今井町近辺に居住していると、孫や別居子との交流が容易になるため、地縁や選択縁よりも血縁との交流傾向がみられる。

5. 3 遠居の場合の〈楽しい〉相手

楽しい場所が1つの場合、事例数11のうち「別居している息子」(3例)や「孫」(2例)がみられ、特に「車や電車で20～30分」の時間的距離が比較的近い場合は別居子や孫が楽しい相手になる傾向がある。一方、楽しい場所が2つの場合、事例数22のうち1番目に楽しい相手には「孫」(3例)や「別居している娘」(2例)、2番目には「孫」(5例)や「別居している息子」(2例)や「別居している娘」(1例)がみられる。遠居の場合は、時間的距離が「車や電車で20～30分」と近ければ孫や別居している息子や娘が楽しい相手になっているが、距離が遠いと別居子や孫よりも「趣味・習い事を通じた友人」や「近所の友人」の方が若干多くなる(表5)。

6. 空き家の利用からみた交流場所の要求

6. 1 空き家の利用に関する要求

くつろげる相手や楽しい相手として、今井町の地縁を通じた友人が少ないのは、事例4の自由記述に指摘されていたように、今井町内の身近な所に町内の人が個人的に利用できるくつろげる空間や町内の人が気軽に交流できる空間は不足しているためと推察できる。そこで、世帯票(N=329)において今井町内の空き家の利用法をたずねた結果から、このことを検討する。表6に示すように、世帯票回答者の年齢別にみると65才以上に「町の人と気軽に交流できる所」の要求が顕著であり、高齢者が気軽に地域の人と交流できる場が求められていることがわかる。さらに、世帯票に回答した65

表6 空き家の利用希望(世帯票)―世帯票回答者の年齢別―

希望内容	回答者の年齢別	
	65才以上 n=114	65才未満 n=211
自分の子どもが近くに住める家	17.5	21.4
観光客や知人等が泊まれる所	17.5	24.3
軽い食事や喫茶ができる所	19.3	21.0
店舗	8.8	10.0
町の人と気軽に交流できる所	28.1	21.4
様々な世代の人と交流できる所	12.3	16.2
老人介護の支援や精神的ケアをする所	20.2	22.9
高齢者が何人かで一緒に住み、生活支援を受ける所	13.2	11.9
気のあった友人が集まって住む	11.4	6.7
陶芸等の芸術活動に利用する	10.5	13.8
文化教室・講演等の催しをする	11.4	18.6
町家の建築技術を訓練・養成する	5.3	7.1
子どもや観光客が町家での生活体験をする	5.3	5.2
その他	8.8	4.8
わからない	39.5	31.4

[複数回答, 単位: %, (不明のぞく)]

才以上の者¹⁴⁾のうち、楽しい場所が2つある場合に「町の人と気軽に交流できる所」の要求が多く(40.8%), 特に2番目に自宅外を志向している場合(「内外」の45.5%, 「外外」の41.2%)に多い。2番目に楽しい場所は子の家や友人の家が多いことから、住宅の周辺に身近な交流の場が求められていることが推察できる。

6. 2 今井町内における集会施設の現状と今後の課題

今井町内には集会施設として自治会の集会所、公民館、今井まちなみ交流センター、今井まちづくりセンターがあり、集会所は自治会の会合や着付け教室等、公民館は料理や俳句等の活動に利用され、施設は充実している。しかし、表6に示すように、今井町居住者が高齢期に充実した生活を送るには、集会所や公民館のような今ある活動の場だけでは不十分であり、気の向いた時に利用できる場が求められている。したがって、空き家を利用したり、施設の利用の仕方を考えることでその要求に応える必要性が指摘できる。例えば、まちづくり活動の拠点として町家を再生した今井まちづくりセンター¹⁵⁾は、利用の仕方を工夫することによって、今井町の居住者がまちづくりに対する意識を高めていける結束の空間¹⁶⁾となり、また、保存等に関わる情報交換や交流の空間となる可能性がある。

また、くつろげる・落ち着く場所として、公園等があってもよいと思われるが、今井町内には児童公園しかなく、これは重要文化財である今西家の隣にあり立地はよいが、くつろげる・落ち着く場所にはなっていないことがわかった。現在、今井町内の居住者が、公園のような自宅外の公的な空間でくつろぐ習慣や生活スタイルがなくても、新しく移って来る居住者や観光客等が散策の途中でくつろぐこともあると思われる。前報で述べたように今井町は持家と借家、不動産の継承と創設によって住宅規模が異なる状況¹⁷⁾をふまえると、特に住宅規模の小さい場合に個々の住宅の狭さを補うための共用空間があればよいことが示唆される。昨年、町家を利用した観光客のための無料休憩所¹⁸⁾はできたが、今井町の居住者が気軽に個人的利用のできる共用空間が必要であると考えられる。公民館や今井まちづくりセンターといった集会施設は一応存在するが、ここで述べている身近な共用空間¹⁹⁾は今井町内に不足していることから、

施設の使い方を検討し、くつろげる場所や楽しい場所となりうる空間を今井町内や近辺に用意しておくことが地域生活を豊かにする上での整備課題として指摘できる。

7. まとめ

- 1) 今井町において、65 才以上の高齢期における平日と休日の昼間の居場所から「物理的居場所」を把握したところ、平日の昼間は自宅内にひとりである場合が多く、休日の昼間は自宅内に配偶者や子や孫という場合が多いことがわかった。
- 2) 〈くつろげる・落ち着く〉場所は自宅内に偏っており、相手は自分ひとりあるいは配偶者や孫等の血縁が多い。〈楽しい〉場所は自宅外の傾向がみられ、楽しい相手は自分ひとりあるいは血縁や選択縁が多い。今井町には昔からの地縁が根強く存在すると予測していたが、地縁を通じた友人との交流志向は少ない。今井町には公民館や集会所があっても、日常的に交流をうながすような空間として充分に利用されていないことが指摘できる。
- 3) 子との居住形態別に〈楽しい〉相手をみたところ、子と同居の場合には、同居子や孫が多いと予想されたが、選択縁との交流の方が多いことが明らかになった。一方、子と近居の場合には、同居の場合に比べて別居子や孫との交流がみられる。しかし、子と近居の場合に規模の小さい住宅が多く、近居していても別居子や孫が交流の相手になっていない状況も存在する。
- 4) 町内や近辺に身近な公園等のくつろげる空間や今井町の空き家を利用して居住者が気軽に交流でき楽しめる空間を整備する必要性が指摘できる。くつろげる空間、楽しい空間がない居住者や自宅内にとどまっている居住者を自宅外に向け、空間の選択性を高めることによって、居住地としての魅力は増すことが示唆される。

注

- 1) 文献1)を参照。
- 2) 世帯票の自由記述欄に散見された意見。
- 3) 文献2)を参照。
- 4) 文献1)、3)を参照。
- 5) 本研究では、生活空間に備わるべき機能として、個人の自立と交流が生活の豊かさを高め、今井町の継続性を支えるしくみをつくりだすと考え、〈くつろげる・落ち着く〉、〈楽しい〉という鍵になる単純な表現を用い、今井町居住者の「精神的居場所」を把握している。〈くつろげる・落ち着く〉は住宅に求められる基本的機能であり、〈楽しい〉はより積極的な生活の要求として位置づけられ、これら2側面から「精神的居場所」を把握している。
なお、高齢者の居場所を地域施設の利用との関連から把握した研究には文献4)があり、本研究ではそこでいう居場所を「物理的居場所」として分析している。その他、単身高齢者の住居内における物理的「居場所」を分析した文献5)、地域施設の利用について「交流」の視点から分析した文献6)を参照。
- 6) 文献1)を参照。
- 7) 文献1)を参照。文献1)に述べているが、悉皆調査の結果、空き家・留守宅は27例存在し、所有者がいても居住者がいない住宅が確認できた。また、1つの世帯が住宅を複数所有する場合が存在した。なお、調査拒否が70例存在するが、これら多くは高齢単身者および就業に支障がある者による拒否である。
- 8) 榎原市1997.10.31時点の集計による。文献1)を参照。
- 9) 別居の場合は、最も近くに居住する別居子との時間的距離が「歩いて15分未満」である場合を「近居」、それ以外を「遠居」に分けて分析している。
- 10) 「夜間(18時以降)最も長くいる場所」についてもたずねたが、65才以上の高齢者は自宅内の「居間」(平日62.1%、休日62.9%)あるいは「自分の部屋」(平日24.7%、休日24.7%)にいる場合がほとんどであったので、ここでは活

動時間帯である「昼間(9時～18時)最も長くいる場所」を分析する。

- 11) 配偶者は厳密には血縁に含まれないが、本研究では配偶者を血縁に含めて分析している。交流の志向性として、配偶者や子等の家族、自治会・婦人会・保存会等の地域の友人、地域と関連のない友人を想定し、順に「血縁」「地縁+選択縁」「選択縁」に大別した。「選択縁」の概念については文献7)を参照。
- 12) また、80才以上の者には年齢的理由から個人票への回答が難かしく調査拒否もあったので、比較的活動的な者が相対的に多く含まれた結果と考えられる。
- 13) 文献1)を参照。
- 14) 世帯票への回答は世帯主または配偶者に依頼しており、老夫婦世代と若夫婦世代とが同居している場合は、若夫婦の世帯主または配偶者に依頼した。この世帯票に回答した65才以上(n=114)のうち個人票にも回答している者が112例あり、この112例を対象として楽しい場所の有無別に分析を行った。
- 15) 1998年4月に町家再生のモデル住宅として開設した今井まちづくりセンターは現在観光客や視察等の見学者が多く、展示のために利用されたのが1件のみであり、具体的な利用のされ方はこれからの状態である。
- 16) 今井町が重要伝統的建造物群保存地区の選定にいたるまで、住民間には保存に対する賛否の意見が存在していたことをふまえると、今後保存に向けてまちづくりの意識を深めていくことは重要なことであろう。
- 17) 文献1)を参照。今井町の歴史性に関係した特徴として、借家居住の存在があげられる。それらの住宅規模は小さく、最低居住水準に満たない住宅が一定の割合で存在する。今回の調査では借家世帯からの回答も得ている。
- 18) 無料休憩所は婦人会のボランティアが常駐しており、まちづくりセンターも保存会のボランティアによって運営され、これらは顔見知りの町の人が情報交換できる場でもある。しかし、調査結果では楽しい相手として地縁を通じた友人をあげる例が少なく、地域活動に参加している人は、町全体では一部のみに限られているといえよう。このことから、今井町の居住者が気軽に個人的利用のできる共用空間が必要であると考えられる。「共用空間」については、大都市低層住宅における「屋外共用空間」の機能や計画課題を分析した研究として文献8)を参照。
- 19) 新設のニュータウンや住宅地等では計画段階で共用空間が考慮されているが、今井町のような歴史的居住地では欠落していることが今回の調査結果から把握できる。今井町では、居住者が気軽に利用できる身近な共用空間はこれまで計画されることがなかったためであろうが、現在不足しており、居住者からの要望もあることから、計画されることが望ましい。

参考文献

- 1) 牧野唯・今井竜子：「親子同居からみた居住形態の現状と居住の継承に関する調査研究」日本建築学会計画系論文集 No.510, pp.117-124, 1998.8.
- 2) 総理府：「国民生活に関する世論調査」
- 3) 小出和郎：「今井町のまちづくりの課題」渡辺定夫編『今井の町並み』同朋舎出版, pp.137-138, 1994.
- 4) 李乙圭ほか2名：「社会的交流からみた地域施設の利用しやすさに関する考察」日本建築学会計画系論文集 No.493, pp.145-152, 1997.3.
- 5) 古賀紀江・高橋鷹志：「一人暮らしの高齢者の常座をめぐる考察 高齢者の住居における居場所に関する研究 その1」日本建築学会計画系論文集 No.494, pp.97-104, 1997.4.
- 6) 浅沼由紀ほか2名：「都市居住高齢者の生活特性と余暇関連施設の利用特性について 都市居住高齢者の地域施設利用構造に関する研究 その2」日本建築学会計画系論文集 No.492, pp.119-125, 1997.2.
- 7) 上野千鶴子：『近代家族の成立と終焉』岩波書店, 1994.3.
上野千鶴子、電通ネットワーク研究会：『「女縁」が世の中を変える』日本経済新聞社, 1988.9.
- 8) 藍澤宏ほか2名：「近隣住民による屋外共用空間の保全・再整備に関する研究 一大都市の低層住宅地を対象として」日本建築学会計画系論文集 No.508, pp.51-58, 1998.6.

(1998年9月10日原稿受理, 1999年2月26日採用決定)